

かご・アイデアの器:バスケットー

■■復元ノート3■■

●東名遺跡縄文編みかごワークショップ：2012年～2014年

上記ワークショップが行われた場所：

佐賀県立美術館ホール(2012年) 東名縄文館（2013,2014年）

協力：編み物研究会

素材：紙バンド、紙紐など

内容：東名遺跡から出土したかごの編み技術、造形方法、綴じ方などを体験する。

■ワークショップの目的について：

第1回目のワークショップは2012年の東名シンポジウムで行った。

東名遺跡から出土した大型かごの特徴である編み方や造形方法などを体験してもらうのが目的だった。場所は佐賀県立美術館ホール。椅子に座ってもらったまま、机が無く、照明がやや暗い状態で行わなければならなかった。

当日の参加者はシンポジウムの研究者、遺跡の愛好者など、編みの経験は参加者それぞれで様ではない。限られた時間内ではかごを完成することも難しい。しかし、「あじろ編み」の特徴を体験してもらえば、シンポジウムの中で行った意味があると考えた。

■「あじろ」を体験してもらうのには：

時間は1時間30分。遺物のかごをそっくり作るのは難しい。仮に似たものを作っても、かご作りのワークショップと同じになれば、あまり意味が無い。編むことを通して縄文人の知恵を自らの問題解決に繋げて体験してもらうのが良いと思った。あじろ編みは平面でもできたが、タテ材で螺旋状に編む方が問題が起こる。そこで、予め底を組んだタテ材を準備、編み材を入れてあじろ編みすることだけに絞った。参加者は右のような姿勢でかごを編むことになったが、縄文人も胡坐を組んだり、座って編んでいたのでは、と考える。使った素材は紙バンド、ヘギ材同様なもので使いやすい。その他に紙紐や麻紐。ワニ口クリップも準備してもらう。



■問題とその解決方法の体験

タテ材を螺旋状に編めば、たちまち本数の影響を受ける。あじろ編みの場合も例外でない。本数によってうまくあじろ編みの流れが続くこともあれば、編むタテ材の本数を変えないと編めないこともある。実際の遺物のかごではずっとタテ材の数が多く、3本、または1本編むことであじろ編みが続くよう調整している。この他、数種の方法があることを解説した上で、最初のタテ材を二つに割いて2本にして、（本数では1本増えることになる）あじろ編みの流れが続くことを体験してもらった。

■反省：

初めて編む人にとってみると、あじろ編みが難しいことを実感した。編むだけで精一杯という状況であったので、うまく問題解決の体験ができたかどうかは心配である。

■2回目の縄文編みかごワークショップは2013年に行った。今回の場所（東名縄文館）では机があったのと、作業時間が3時間ほどだったので、かご全体の完成まで考えること

が可能であった。

■ 内容

上記と同じように出土のかごの特徴を体験してもらうことにある。
しかし、紙紐の色を変えてわかりやすくした。あじろ編みの問題についてはタテ材を割くことで解決してもらった。
このかごの底は紙バンドのそのままの幅である。底はござ目に組んでもらいその周りを麻紐で振り編みをしてとめてもらう。
その後、各タテ材を半分に割いてもらった。おかげで複雑な底を組まなくて済んだ。

■ 特徴をどのように配分するか：

復元した小型かごの編み方を参考にする。小型かごのポイントとなる、側面のあじろ編み、別素材とのござ目、縁までのござ目、口縁の綴じを行うことにした。それらの配分をあじろ編みとござ目を半分にして、口縁付近を長くとり綴じを掛けやすくしている。

■ 伝えたいこと

あじろ編みがタテ材の間隔を広げて均等な幅にすることができる技術であること、またタテ材の本数に影響を受けること、また、ござ目をする事でタテ材が重なり、結果的に縮める効果があることを体験してもらい、編み方と形が密接に関係することを縄文人が知っていて、それらの編み技術を自由に使い分けていたということを知ってもらいたい。

■ 3回目の縄文編みかごワークショップ（2014年10月4日に予定）

前回の反省を踏まえて、初心者、編んだことのある経験者の2グループに分けることとなる。右の写真が初心者の方に作ってもらう予定のかご。

あじろ編みに慣れていれば、タテ材を等間隔に広げて編むことができるが、あじろ編みが障害になって、次に進めなくなるか、または時間がかかってしまう。
そこで、ござ目編みで数段編んでもらい、あじろ編みの部分を少し入れた。
こうすることで、編むことを始めて体験する方にとって、タテ材の上下を編み材が動くことで編む組織ができることを実感してもらえる。
また、分かりやすいように編み材の色を変えてみた。

さて、この結果は後日発表します。



備考：このページの文章、写真の転用についてはご連絡をお願いします。

「かご・アイデアの器：バスケットリー」では皆様からのお便りをお待ちしています。サイト制作：Takamiya Noriko